

## 『探見』2月号へ寄稿

氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援） 都道府県：東京都

下記のようなメールマガジンに寄稿依頼され添付の文章を書きました。特使の役割として私なりの発信のつもりです。活動報告の一端とさせていただきます。

【『探見』19年2月号】

[『探見』2月号](#)

【メールマガジン】

・『探見』2月号をお届けします



2019年も1カ月が過ぎました。2月は「正月」と桜咲く3月の間に挟まれ、おまけに他の月に比べて日数も少なく、万事地味な月なようです。しかし4日は立春です。まあ多く多くのところで梅の花が開き、微かな香りをただよわせ、春の足音の近づきを知らせてくれることでしょう。そんな自然の息吹の中で、皆様お元気でお過ごしのことと存じます。

さて今日は恒例の『探見』をお届け申し上げます。お時間のある時にでも目を通していただければ幸いです。

今月のお届けは郵送分101通、メール分806通です。さらに増えればいいなあ、と思っています。読者になっていただけるような方がいらっしやったら、ぜひお知らせください。

今月のメニューは下記の通りです。

- ・【トップ記事】「伝統」と「現代」を繋ぐ歴史都市金沢の景観（いしかわ観光特使 西島幸夫）
- ・【短見長見】休ませていただきました
- ・【大江戸まち探見】ご利益倍増 快晴の隅田川七福神巡り（関根康太）
- ・【わたしの見てある記】旧新橋停車場 鉄道歴史展示室（若染雄太）
- ・【発行後記】建物、景観評価の「尺度」（も）

『探見』発行人 森治郎

### ■これからの「大江戸まち探見」予定

- ・2月は休みます
- ・3月23日（土）10：30～16：00 花の下、上野・谷中 彰義隊の跡を歩く
- ・4月6日（土）10：10～15：30 北条氏の夢の跡 八王子「滝山城」の遺構と桜
- ・5月11日（土）10：30～16：00 庭園美術館と雅叙園、杉野学苑衣装博物館をゆっくりと
- ・6月15日（土）11：00～15：30 鷗外記念館からアジサイ満開の白山神社・小石川植物園を訪ねる

※申し込み、お問い合わせは朝日カルチャーセンター担当者（03-3344-2041）にご連絡ください



2019年2月号  
(通算 95号)

探見とは「ゆっくり歩いて、見て  
聞いて、触れて、読んで。知ること。  
そしてそのことを楽しむこと」である。  
編集人 酒井憲一 発行人 森治郎

## 「伝統」と「現代」を繋ぐ 歴史都市金沢の景観

いしかわ観光特使 西島 幸夫

北陸新幹線が金沢まで延伸して今年の3月14日で4周年を迎える。新幹線効果で金沢はいつも観光客で賑わっている。開業3年目の乗車率も前年比変わらず高い水準で推移している。

開通前の2010年秋、石川県は大勢のロコミの果たす役割が大きいと「いしかわ観光特使」を制定した。応募制で小論文を書いて提出し、毎年活動報告が求められるボランティア制度だ。18歳まで金沢で過ごし、その後は主に東京で過ごした私は、故郷へささやかな恩返しをしたいと抱負を述べ、知事より任命された。帰省の折などに自分の目と足で確かめ、ふるさとの魅力の発信に努めている。

### ●駅前広場に「もてなしドーム」と鼓門

2015年3月14日、東京駅発9時台の「かがやき」に乗車して金沢へ着いた。上野から夜行急行列車で10時間余かけて往来した半世紀前を想うと、東京から乗り換えなしの2時間半は夢のような速さだった。駅（兼六園口）から駅前広場へ出ると、巨大なガラスの「もてなしドーム」と歓迎ゲート「鼓門」が迎えてくれた。歓迎・祝賀行事で笛や太鼓が鳴り響き、盆と正月が一緒に来たような賑やかさだ。金沢開闢以来の一大イベントの情景がつい昨日のように思い出される。

久しぶりに金沢を訪れた人は、装いを一新した駅前広場に驚くだろう。新幹線の駅舎は一般に機能重視で、全国どこへいっても似通っているのに比べると、金沢駅は個性的でユニークな佇まいだ。駅前広場はガラス3千枚とアルミフレーム6千本で覆われた高さ30mのドームになっている。アルミ構造物のドームとしてはわが国で最大級の規模だ。最先端の技術を使ってもてなし空間を創出した。雨や雪の多い金沢では雨具は必需品で、ドームは客人にそっと傘を差し出す「もてなしの心」を表現している。その先に歓迎ゲートの「鼓門」（木造）が建っている。伝統芸能である加賀宝生の鼓をイメージした門だ。金沢は藩政時代から宝生流の能楽が盛んだったため伝統楽器をデザインしている。前者は小堀為雄、水野一郎、斎藤公男らが設計、構造計算をし、後者は白江龍三の設計。

金沢市は、1989年から都市景観の第一人者・建築家の芦原義信（1918～2003）を顧問に迎え、新し



北陸新幹線開通日の金沢駅ホームで

◆「短見長見」は休みました

金沢駅前の「鼓門」と「もてなしドーム」(向こう側)  
(ほっと石川旅ねっとHPから)



い駅前広場について検討を続けてきた。駅を出て眼前に広がる広場の景観は街の顔であり要であるという。議論を重ねて個性ある広場が完成したのは2005年だった。実に16年の歳月が経っていた。広場は市民から公募して「もてなしドーム」と命名された。ドームは腐食しにくく雪の重みや耐久性を考えた構造で、北陸の気候風土に合わせて利用客がスムーズに移動できるよう配慮し、人優先の広場になっている。「鼓門」は伝統を、

「もてなしドーム」は現代を象徴している。金沢のような歴史都市は「伝統」と「現代」という二つの重要なテーマを背負っているので、その調和を図ろうと苦心してきた。

### ●「世界で最も美しい駅」の一つに

2005年3月の広場の完成記念式典で、ある出席者は「この門も100年たてば評価されているかもしれませんが」と「街の顔」を寿ぐ言葉にしては歯切れの悪い挨拶をした。実際市民の間にも「異様だ」「違和感がある」という批判が多かった。その昔、パリのルーブル美術館がガラスのピラミッドを造って物議をかもしたことを思い出した。ところが2011年、アメリカの旅行雑誌『トラベル&レジャー』が金沢駅を日本の鉄道駅として初めて「世界で最も美しい駅」14駅の一つに選んだ。総合的かつ世界的視点から評価されたことは嬉しい吉報であった。批判的な声も次第に収まっていった。

同じ頃(2004年)、斬新な円形総ガラス張りの金沢21世紀美術館が誕生した。妹島和世と西沢立衛の設計だ。当初、現代美術館は伝統都市にふさわしくないと疑問視されたが、新しいタイプの気楽に

金沢21世紀美術館(向市観光協会HPから)

立ち寄れる庶民派美術館として、巧みな運営で年間 250 万人が来場する人気の美術館になった。

今や、金沢 21 世紀美術館ともてなしドームは金沢の新しい観光スポットになっている。いずれも伝統文化に根差しながら新しい伝統を創り続ける金沢を象徴する建築構造物だ。

### ●静かに人気が高まる「鈴木大拙館」

もう 1 か所、私が好きな「鈴木大拙館」を紹介したい。新幹線が開通して以来、来館者数は右肩上がりに伸びて 2017 年の実績は開通前の 2 倍、外国人は 4 倍も増えたという。金沢 21 世紀美術館の前館長、秋元雄史（現東京藝術大学大学美術館長、兼練馬区立美術館長）は在任中、美術館を訪れたゲストを必ず案内したという（注 1）。

鈴木大拙（1870～1966）は「Zen」の思想を世界に広めた国際的な仏教学者だ。記念館と付けないのは、過去の人物として記憶するのではなく、大拙の生き方、考え方に今何かを感じてもらいたいからだという。

展示棟はいってシンプルで、大拙の著作と数点の書や書簡が展示され、静謐な学習スペースもある。中庭へ出ると白い壁と回廊に囲まれた水鏡の庭「思索空間」が現れる。回廊を巡って池に臨む禅堂を模した席に黙座する。静かに吐く息吸う息になりきっていくと、雑念を滅却して無の境地に入れる空間だ。大拙が説いた「無」であり「無心」の境地かもしれない。自然に心が和らぎいつまでも此処に坐っていたいような心地になる。

当館の設計はニューヨーク近代美術館新館や豊田市美術館などを手掛けた美術館建築の名手、谷口吉生（1937～）だ。薫陶を受けた父君の谷口吉郎（1904～79）は金沢出身で東宮御所や東京国立博物館東洋館等の大作を手掛けた建築家。吉生は父の疎開で幼少期を金沢で過ごしている。父子唯一の合作が金沢市立玉川図書館（1978 年）。市は、名誉市民第 1 号である谷口吉郎の寺町台生家跡地を、吉生から寄付を受け、この夏「谷口吉郎・吉生記念金沢建築館」を開館する予定だ（注 2）。

金沢の風土に育まれた建築物と個性ある街並みを「建築文化」と位置付け、その魅力を発信していく。都市や建築に関する展示、谷口吉郎に関する建築模型、遺品などが展示される。設計は吉生が担当し、2 階には吉郎が設計した迎賓館赤坂離宮和風別館「游心亭」を再現した広間や茶室も設けられる。西側には遊歩道を作り、寺町台と犀川の河川敷を結ぶ予定だ。金沢らしい新たな文化拠点に期待



室生犀星の愛した犀川上流を望む。右手の寺町台に建築館が建つ。

がふくらむ。

### ●持続的発展につながる街づくり

金沢らしさを大切に、持続的発展につながる街づくりに取り組んできたのは、前市長の山出保<sup>やまでたしほ</sup>の功績が大きい。氏は1990年から5期20年にわたり市長職に在任し、この間全国市長会会長を2期4年務めるなど街づくりのベテランである。金沢の街づくりにかけてきた熱い思いが語られる著書が2冊ある(注3)。金沢の魅力がすべてわかる格好の書であり、金沢を事例にした街づくりの指南書でもある。

氏は「金沢らしさ」として、親しさ、癒やし、こだわり、おもいやり、の4つを挙げている。金沢は、落ち着いた佇まいの美しい街並みと美味しいものの宝庫で、期待を決して裏切らないだろう。ぜひ訪れて金沢の良さを十分楽しんでいただきたい。

(注1) 参考文献『おどろきの金沢』秋元雄史(講談社2016年6月刊)

(注2) 北陸中日新聞(朝刊)2018年12月4日号

(注3) 参考文献『金沢を歩く』山出保(岩波新書2014年7月刊)

『まちづくり都市 金沢』山出保(岩波新書2018年9月刊)

※文中敬称略

(にしじま・ゆきお ISO 取得支援経営コンサルタント)

## 【大江戸まち探見】ご利益倍増 快晴の隅田川七福神巡り

**開報 康太**(大江戸まち探見ツアーアシスタント、早稲田大学4年)

なにかと「平成最後の」と頭に付くことが多くなっていますが、時代の変り目となる2019年を迎えて最初の大江戸まち探見は、1月7日(月)新春恒例の七福神巡りです。昨年は谷中の七福神巡りでしたが、今年は隅田川七福神です。この日は関東の冬らしいカラッとした、「雲一つない晴天」という言葉が決して誇張ではないほどの青空でした。

集合は少し離れた浅草にある文化観光センターです。ご承知の方が多いと思いますが、雷門と通りをはさんで向き合っています。こちらはルーバーという細長い板を8階の建物全体にめぐらせたデザインで、新国立競技場の設計を担当した隈研吾<sup>くま</sup>さんの作品です。建築にもうるさい? 森治郎先生は「木の鏝をまとっているようだ。隈設計にはいいものが多いと思うが、これはあまり感心しないね」と厳しい評価。その建物をなぜ集合場所にしたかという、隅田川七福神のコースには団体で食事できる場所がないため、浅草で食事してから電車で隅田川をわたって七福神巡りスタートの多聞寺に行こうという計画。大混雑の浅草で、観光センター6階の多目的スペースはかなりすいていて、最適の集合場所なのです。

午前11時、一行19人はだれも混雑に巻き込まれず無事集合。「せっかく浅草にきたのだから」と目の前の仲見世を歩きます。と言っても、仲見世通りはぎざざり人で埋まっているため、店の裏道を通っていきます。

木の鏝?がひとさわ目立つ  
浅草文化観光センター



# 隅田川七福神めぐり

一里田区賞賛無形民俗文化財

- 1 物取屋  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 2 吉野子  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 3 高茶  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 4 舟屋  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり

12 後援  
一里田区観光協会  
TEL. 03-5608-6951  
隅田川七福神めぐり



- 5 まねきねこ  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 6 千代子舟橋  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 7 聖提組  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 8 カタマ  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり

- 9 生粉亭  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 10 世帯  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり
- 11 舟屋  
（江戸時代）  
隅田川七福神めぐり



- 史跡・旧跡・寺社  
 1 横釘記念館 2 安永寺(隅田川) 3 隅田川神社 4 隅田川神社(本願寺) 5 隅田川神社(本願寺) 6 隅田川神社(本願寺) 7 隅田川神社(本願寺) 8 隅田川神社(本願寺) 9 隅田川神社(本願寺) 10 隅田川神社(本願寺) 11 隅田川神社(本願寺)
- 資料館・博物館  
 12 隅田川七福神資料館 13 隅田川七福神資料館 14 隅田川七福神資料館 15 隅田川七福神資料館 16 隅田川七福神資料館 17 隅田川七福神資料館 18 隅田川七福神資料館 19 隅田川七福神資料館 20 隅田川七福神資料館 21 隅田川七福神資料館 22 隅田川七福神資料館 23 隅田川七福神資料館 24 隅田川七福神資料館 25 隅田川七福神資料館 26 隅田川七福神資料館 27 隅田川七福神資料館 28 隅田川七福神資料館 29 隅田川七福神資料館 30 隅田川七福神資料館 31 隅田川七福神資料館 32 隅田川七福神資料館 33 隅田川七福神資料館 34 隅田川七福神資料館 35 隅田川七福神資料館 36 隅田川七福神資料館 37 隅田川七福神資料館 38 隅田川七福神資料館 39 隅田川七福神資料館 40 隅田川七福神資料館 41 隅田川七福神資料館 42 隅田川七福神資料館 43 隅田川七福神資料館 44 隅田川七福神資料館 45 隅田川七福神資料館 46 隅田川七福神資料館 47 隅田川七福神資料館 48 隅田川七福神資料館 49 隅田川七福神資料館 50 隅田川七福神資料館 51 隅田川七福神資料館 52 隅田川七福神資料館 53 隅田川七福神資料館 54 隅田川七福神資料館 55 隅田川七福神資料館 56 隅田川七福神資料館 57 隅田川七福神資料館 58 隅田川七福神資料館 59 隅田川七福神資料館 60 隅田川七福神資料館 61 隅田川七福神資料館 62 隅田川七福神資料館 63 隅田川七福神資料館 64 隅田川七福神資料館 65 隅田川七福神資料館 66 隅田川七福神資料館 67 隅田川七福神資料館 68 隅田川七福神資料館 69 隅田川七福神資料館 70 隅田川七福神資料館 71 隅田川七福神資料館 72 隅田川七福神資料館 73 隅田川七福神資料館 74 隅田川七福神資料館 75 隅田川七福神資料館 76 隅田川七福神資料館 77 隅田川七福神資料館 78 隅田川七福神資料館 79 隅田川七福神資料館 80 隅田川七福神資料館 81 隅田川七福神資料館 82 隅田川七福神資料館 83 隅田川七福神資料館 84 隅田川七福神資料館 85 隅田川七福神資料館 86 隅田川七福神資料館 87 隅田川七福神資料館 88 隅田川七福神資料館 89 隅田川七福神資料館 90 隅田川七福神資料館 91 隅田川七福神資料館 92 隅田川七福神資料館 93 隅田川七福神資料館 94 隅田川七福神資料館 95 隅田川七福神資料館 96 隅田川七福神資料館 97 隅田川七福神資料館 98 隅田川七福神資料館 99 隅田川七福神資料館 100 隅田川七福神資料館
- 公園・イベント  
 1 隅田川公園 2 隅田川公園 3 隅田川公園 4 隅田川公園 5 隅田川公園 6 隅田川公園 7 隅田川公園 8 隅田川公園 9 隅田川公園 10 隅田川公園 11 隅田川公園 12 隅田川公園 13 隅田川公園 14 隅田川公園 15 隅田川公園 16 隅田川公園 17 隅田川公園 18 隅田川公園 19 隅田川公園 20 隅田川公園 21 隅田川公園 22 隅田川公園 23 隅田川公園 24 隅田川公園 25 隅田川公園 26 隅田川公園 27 隅田川公園 28 隅田川公園 29 隅田川公園 30 隅田川公園 31 隅田川公園 32 隅田川公園 33 隅田川公園 34 隅田川公園 35 隅田川公園 36 隅田川公園 37 隅田川公園 38 隅田川公園 39 隅田川公園 40 隅田川公園 41 隅田川公園 42 隅田川公園 43 隅田川公園 44 隅田川公園 45 隅田川公園 46 隅田川公園 47 隅田川公園 48 隅田川公園 49 隅田川公園 50 隅田川公園 51 隅田川公園 52 隅田川公園 53 隅田川公園 54 隅田川公園 55 隅田川公園 56 隅田川公園 57 隅田川公園 58 隅田川公園 59 隅田川公園 60 隅田川公園 61 隅田川公園 62 隅田川公園 63 隅田川公園 64 隅田川公園 65 隅田川公園 66 隅田川公園 67 隅田川公園 68 隅田川公園 69 隅田川公園 70 隅田川公園 71 隅田川公園 72 隅田川公園 73 隅田川公園 74 隅田川公園 75 隅田川公園 76 隅田川公園 77 隅田川公園 78 隅田川公園 79 隅田川公園 80 隅田川公園 81 隅田川公園 82 隅田川公園 83 隅田川公園 84 隅田川公園 85 隅田川公園 86 隅田川公園 87 隅田川公園 88 隅田川公園 89 隅田川公園 90 隅田川公園 91 隅田川公園 92 隅田川公園 93 隅田川公園 94 隅田川公園 95 隅田川公園 96 隅田川公園 97 隅田川公園 98 隅田川公園 99 隅田川公園 100 隅田川公園

仲見世の裏を通り抜けたところ、浅草寺の横にある浅草神社には、浅草七福神のうち恵比須様が祭られています。これも「せっかくここまで来たのだから」と参拝していくことに。でも本殿の前まで長い長い行列です。森先生はその脇をどんどん進みます。なんと、本殿前の大きな賽銭箱の横に「お急ぎの方」用に小さな賽銭箱があったのです。19人の参拝がアツという間に終わりました。

一行は11時半きっかりに「割烹神谷」に到着です。こちらは電気ブランで有名な神谷パーの上にあります。テーブルに松花堂弁当がずらりと並び、熱いお茶まで入っていました。数分でも遅れるとお茶はぬるくなっていたでしょう。

早めの昼食をすませた一行は、東武浅草駅から東武スカイツリーラインに乗り、隅田川七福神めぐりに向かいます。車窓のすぐそばに東京スカイツリーの下の部分が見え、その迫力に圧倒されます。浅草駅から4つ先の鐘ヶ淵駅で降り立ちます。

さて、これから巡る隅田川七福神について少し紹介しましょう。隅田川七福神は、江戸時代から続く由緒正しき七福神で、谷中の七福神に次いで2番目に古い七福神巡りと言われていています。200年前、向島百花園を開いた佐原鞠場という骨董商と、彼を囲む狂歌師大田南畝（本業は幕府の役人）や絵師酒井抱一（姫路藩主の弟）、谷文晁ら教科書にも乗っているような文化人たちの遊び心が発端となりました。酒の席の盛り上がりの中で、だれが言い出したのか「谷中（やな）で流行っている七福神巡りを向島でもやろうではないか」ということになり、七福神巡りが始まったそうです。

最初に向かうのは多聞寺です。七福神めぐりは通常南から始めることが多いので、一番北に位置する多聞寺は、最後の順番となるはずですが、足の便などから多聞寺からスタートする人も多いようです。そのため七福神の御分体を乗せる宝船は南北両端にある三囲神社と多聞寺で頒布されています。

多聞寺では毘沙門天を祀っています。古くは天徳年間（957-960）から隅田堤の外の隅田川神社に近い、多聞寺屋敷という所にあったと伝えられ、天正年間（1573-92年）に現在地に移されました。本尊の毘沙門天像は、弘法大師の作と伝えられます。関東大震災や戦災による被害を受けていない多聞寺は、昔の面影を残す区内でも数少ない寺院で、特に茅葺きの山門は享保3年（1718年）に火災により焼失した直後に建てられた区内最古の建造物といわれています。現在でも立派な茅葺きを見せてくれる山門前で全員集合の記念撮影をしました。

一行は呼んでおいたタクシーに乗り、向島百花園に向かいます。2\*ほど離れていて歩くには時間がかかりすぎるためです。こちらは都営の庭園ですが、その庭にあるお堂の中に福祿寿が祀られています。七福神が神社や寺でないところに祀られているのは非常に珍しいのですが、その理由は先に書いたように「隅田川七福神はその福祿寿がいてのこと」だからです。こちらの百花園では七草を竹かごに植え込んだ七草籠が有名であり、明治の中期から皇室にも献上しているそうです。園内でいくつ



隅田川七福神の御朱印と宝船  
船は隅田川の川船を模している

秘蔵していた福袋の個性的な表情をしています

かの七草籠が見られました。まち探見の日は1月7日だったため、園内で売っている七草がゆを食べている人がたくさんいました。私たちも七草がゆで温まりたかったのですが、まだ2福神（浅草神社を入れると3福神）しか巡っていないので、先を急ぎます。

歩いてすぐのところに白鬚神社しらひげがあります。こちらでは「寿老神」が祀られています。実はこの「寿老神」は、七福神の一員である寿老人とは少し違います。隅田川沿岸の七福神を選び出した時に、寿老人を祀ってあるところだけが見つかりませんでした。そのため、百花園のある寺島村の鎮守である白鬚大明神を、その御名前からして白い鬚の老人の神様だろうからと、寿老人にあてました。このことから「寿老神」となっています。そんな大らかなところも江戸人の良さなのかもしれません。



白鬚神社からしばらく歩くと、長命寺ちやうめいに着きます。こちらには弁財天が祀られています。3代将軍家光が鷹狩の途中、不意の腹痛のためこの寺に休憩した際、境内の井戸水を汲み、薬を服用したところ、たちどころに痛みが消え快癒しました。喜んだ家光がその井戸に長命水の名を与えたとことから、以後寺号を長命寺と改めたそうです。そんな水で手水をして、弁財天にお参りしました。本堂の前のお賽銭箱の傍までお出ましいたいたので、美人ぶりがよく分かりました。

すぐ隣が弘福寺。三禅宗の一つ黄檗宗おうぼくの寺院です。山門や本堂の屋根が唐風で、私には非常に興味深い建築様式でした。本堂の中に布袋尊ぶくろくみが祀られています。布袋尊は、七福神の中ではただ一人実在した方です。額が広くてお腹は大きく、いつも杖と大きな布袋を持ち歩き、物を貰えばそれをこの袋に入れて貯え、困る人があると、その中から取り出して施し、しかもなくなるのがなかったといわれています。私も困る人がいたら助けてあげる存在になりたいですが、しばらくは困る人の側になっているかもしれません。

最後に訪れたのは、三囲神社です。こちらには恵比寿様と大黒様おほくろが祀られています。三囲神社が日本橋の越後屋から見て東北の鬼門を塞ぐ位置にあること、三囲神社の「囲」の文字に三井の「井」が入っているため、「三井を守る」と考えられ、江戸時代から三井家の守護社として信仰され、今でも三越を始めとした三井グループ各社から定期的な参詣があるそうです。そういえば恵比寿様も大黒様も「商売繁盛」につながる神様です。

神様たちにお参りする前に、一行は境内裏の隅田川の方へ。すると堤防に向かってなぜか鳥居があります。実はこの神社は隅田川の洪水に遭った後、鳥居の前に堤防が築かれ、対岸から見ると、鳥居が堤から頭だけ出しているように見えるようになったそうです。この光景は広重の浮世絵にも描かれ

長命寺の弁財天、アッパに耐えるお顔だったが、写真のほうがいいが残念



歌川広重の「東都三十六景 隅田川三附り壁」、まわりの景色は一変しているが、鳥居の見え方は変わらない



ています。奇妙な鳥居とスカイツリーをバックに記念撮影です。皆さんはこの後、恵比寿様と大黒様にお参りされたのですが、私は大学の授業があったため、撮影直後にお別れとなりました。

よくよく考えたら、5福神しか参拝していないわけですが、三囲神社の境内には入ったので7福神にお参りしたことにさせていただきます。私は今年で大学を卒業し、社会人となります。新たな生活がよいものとなるように神様たちに願いました。果たしてその願いはかなうのでしょうか…。その答えは就職してみないと、分かりません。

## わたしの博物館・美術館・資料館・工房…見てある記

**旧新橋停車場 鉄道歴史展示室**（港区東新橋 1-5-3 入場料無料。開館時間：10:00～17:00。入館は16:45まで 休館日：毎週月曜日（ただし、祝祭日の場合は開館、翌火曜日が休館）、年末年始。JR 新橋駅「銀座口」5分、地下鉄銀座線新橋駅「2番出口」3分、同浅草線新橋駅「JR新橋駅・汐留方面改札」3分、新交通ゆりかもめ新橋駅3分、地下鉄大江戸線・新交通ゆりかもめ汐留駅「新橋駅方面改札」3分）

**取材・執筆＝若染 雄太**

1872（明治5）年に開業した日本最初の鉄道駅である「新橋停車場」の駅舎外観を再現した建物が、現在の JR 新橋駅と地下鉄・新交通ゆりかもめ汐留駅の間、当時の新橋停車場と同じ場所にある（写真）。そのあたりは江戸時代、

ばんしゅう  
播州 龍野藩や仙台藩の上屋敷があったところだ。

「日本の鉄道発祥地」の象徴としては新橋駅前の SL 広場にある蒸気機関車が有名だが、そこから東に数百メートル、汐留シオサイトのビルの間に行む「旧新橋停車場」も忘れてはならない存在だろう。2003年に完成した建物は、停車場開業の頃に撮られた写真や資料をもとに可能な限り忠実に再現されている。建物2棟が左右対称であり、左側には「鉄道歴史展示室」、右側にレストラン「銀座ライオン」が入っている。

正面玄関を入るととすぐ左に展示室の入り口がある（次ページ写真）。半地下の常設展と2階の企画展に分かれていた。一通り見て20～30分ほどの小さな展示室だ。常設展示では、鉄道敷設を指導したお雇い外国人が使用した西洋陶磁器、改札 錠 や工具類など当時使われた道具などの遺物が見られるほか、床の一部がガラス張りになっており、開業当時の駅舎基礎石の遺構を見ることができる。

私が訪れた日は第49回企画展「明治150年記念 NIPPON 鉄道の夜明け」の期間中だった。年明けに鉄道発祥の地で「鉄道の夜明け」。まさにぴったりの展示だ。新橋～横浜間を走る蒸気機関車を描いた数々の錦絵を見ると、当時、鉄道開通がいかに驚きを持って迎えられたのかが感じられる。「鉄





道の夜明け」は、3月3日（日）まで、その後は、3月19日から「貨物ステーション カモツのヒ・ミ・ツ」が始まるとのことだ。1914年（大正3年）に旅客ターミナル駅として東京駅ができ、新橋停車場は貨物専用の「汐留駅」となり、長い間日本の物流の中心地だった。そのとき、電車線の駅だった烏森駅停車場が「新橋駅」になったのである。



企画展は年3回入れ替わり、広く鉄道に関わる様々なテーマが企画されているようだ。入り口にある過去の企画展図録の見本を見てみると、「シュポー！ 走れ！ 蒸気機関車 鉄道開業ゆかりの地でSLのあゆみを振り返り、動く仕組みを知る」といったものから、「百年前の修学旅行 ハイカラさんと東京駅の時代」や「駅弁むかし物語—お弁当にお茶—」など、実に幅広いテーマで企画されていることが分かる。在庫があるものは販売してくれるとのことなので、展示を見られないまでも、図録を購入して自宅で眺めるのも楽しいのではないだろうか。

一通り見終わった後、建物の裏手へ。石積みホームが再現され、当時の形を模したレールが数メートル敷設されている。車止めの後ろには、日本の鉄道起点だったことを示す「0 哩 標識」があった（写真）。当時と全く同じ場所に立っているようだ。0 哩標の横に立って、かつて横浜に向かって延びた日本初の鉄道線を想像してみる（実際は地上43階建の「汐留シティセンター」が目の前にそびえ立つのだが……）。自分が立っているまさにこの位置が日本の「鉄道の夜明け」なのだと思うと、ザンギリ頭で「文明開化」に立ち会っているような気がしてきた。

ビルが立ち並ぶ新橋・汐留エリアの中であって、当時のままに再現された重厚な石張りの外壁の旧新橋停車場の周囲だけは、少しだけ時間の流れがゆるやかに感じられる気がした。買い物の合間などにふらっと立ち寄って、日本の鉄道の始まりに思いを馳せるのも良いかもしれない。

**発行後記** 今号の西島幸夫さんの「歴史都市金沢の現代的景観」報告をいただいて、昨年4月号での「短見長見」筆者（酒井憲一さん）の嘆きを思い出した。伝統感をイメージした鼓門への視界が、「金属パイプ密林」のもてなしドームによって遮られていない私には結論を出せないが、ここでも「建物」「景観」評価の難しさを感じた。ただ言えることは「その建物、景観がどのようなことの実現を目指しているのか、それをどの程度実現できているか」が最も大切な評価基準ではないかということである。特に公共的建物、景観は作る側の満足以上に利用する側の共感が大切だ。それに照らすと、かなりの建物、景観づくりは「感心できない」ように思える。（も）

**探見2月号（第95号）** 2019年（平成31年）2月1日発行

編集室 157-0066世田谷区成城4-27-3 酒井憲一方、発行所 160-0006新宿区舟町13-6 森治郎方  
j.mori@kurenai.waseda.jp、携帯電話 090-4538-3834、ファクス 03-3359-3354